

Audouze, F. et N. Schlanger (éds.) *Autour de l'homme: contexte et actualité d'André Leroi-Gourhan*, Antibes: Association pour la Promotion et la Diffusion des Connaissances Archéologiques, 2004. 442pp. EUR 35

中尾 世治

1

近年、日本の文化人類学において、モノや技術への関心が高まっている（たとえば、森田 2007; 古谷 2010 など）。これらの議論の主たる参照項としては、一部のポスト・プロセス考古学（古谷 2010）、科学技術の人類学者であるラトゥール（B. Latour）、あるいはラトゥールを介したタルド（G. Tarde）（森田 2011）が名指されている。しかし、モノ、あるいは技術の人類学・考古学の巨人、ルロワ＝グーラン（A. Leroi-Gourhan）が言及されることはない。その一方で、ルロワ＝グーランは母国フランスではその死後から 20 年以上経過しているが、継続して注目され続けている（たとえば、Groenen 1996; Leroi-Gourhan 2004; Villers 2010）。1987 年にルロワ＝グーランの記念シンポジウムがひらかれ、記念論集として出版された（CNRS 1988）。また、人類学者のバルフェ（H. Balfet）によって、1986 年には「動作連鎖」（chaîne opératoire）概念をめぐるシンポジウム、1992 年には『人間と物質』（Leroi-Gourhan 1971）と『動作と言葉』（ルロワ＝グーラン 2007）の新解釈についてのシンポジウムがひらかれている。前者は論集（Balfet 1991）として出版され、後者は『技術と文化』（*Techniques et Culture*）誌に特集号（Martinelli 1993）がくまれている。その後、1995 年に哲学者スティグレイル（B. Stiegler）によって多領域にわたるシンポジウムが開催され、本書（Audouze et Schlanger 2004）はそれをもとにして編まれている（25、以下本書からの引用はページ数のみ示す）。刊行から若干年数を経ているものの、これらのルロワ＝グーランをめぐる論集のなかでも本書は、ルロワ＝グーランの業績全体をほぼカバーしうるほどの諸領域の論者を配しており、それぞれの領域における議論とその後の展開を知るうえでは最適の一冊である。

2

本書は、「序論」ののちに、18 本の論文が「エピステモロジーと理論」・「技術」・「進化」・「洞窟美術」・「同時代におけるルロワ＝グーラン」・「資料」の 6 部にわけられて収録されている。評者の能力と字数の都合上、これらすべてを詳細に論じることはできない。各論文は基本的に独立しており、全体を貫くような強い問題設定ではなく本書全体の要約のようなかたちで「序論」が書かれていることから、末尾の「資料」から順に内容を紹介し、その後、「序論」から本書の全体像をまとめる。

¹ 先史考古学におけるルロワ＝グーランの意義と動作連鎖概念の展開については、山中（2007）が論じている。

3

「資料」では、「ペリグー市立図書館所蔵のアンドレ・ルロワ＝グーラン・蔵書コレクション」(Claudine COHEN, *Le fonds André Leroi-Gourhan à la bibliothèque municipale de Périgueux*)と「アンドレ・ルロワ＝グーラン自身によるルロワ＝グーラン: 彼の人生のアーカイブ」(Philippe SOULIER, *André Leroi-Gourhan par lui-même: les archives de sa vie*)の2本の報告がある。両者ともに初期段階の報告であり、前者は蔵書、後者は未刊行資料の分類法などを提示している。蔵書では、その外観として、ほぼ全世界の考古学に関連する膨大な著書がおさめられ、あらゆる分野の書籍が所蔵されていることが報告されている(319)。百科全書的なルロワ＝グーランの知的傾向をあらわすものではあるが、より詳細なデータの提示と分析がまたれる。

「同時代におけるルロワ＝グーラン」には3つの論文が付されている。「ソヴィエト先史学における生活面の概念」(Serge VASIL'EV, *La notion de sol d'habitat dans la préhistoire soviétique*)によれば、1920-30年代には、ソヴィエト旧石器研究では平面的発掘方法が確立され、生活面を平面的に明らかにすることで旧石器時代の住居構造の研究をすすめていった(276-277)。特に、1920年代後半に実施されたオーダイ(Oudai)川周辺のジョーラウカ(Jourauka)遺跡でのグリッドごとにはしごをたて真上から写真をとり平面図に応用する手法、1936年におこなわれたコスチョンキ(Kostienki)遺跡の詳細な調査報告とそれに基づいて内部の生活空間と活動を行う外部の機能的空間を論じた研究について、1950年代後半と60年代にルロワ＝グーランはレビューを書いている(280-281)。これらの研究手法はパンスヴァン遺跡の発掘手法に大きな影響を与えたものと考えられる(283)。

「アンドレ・ルロワ＝グーランと科学知の普及の戦略」(Noël COYE et Nathalie RICHARD, *André Leroi-Gourhan et les stratégies de diffusion du savoir scientifique*)はルロワ＝グーランによる先史考古学の入門書と主著から先史考古学がいかように語られ、どのような普及の戦略をとったかについて考察している。観察と解釈の中間に「科学的想像」を位置づけ柔軟な解釈を許容すること(291)、最も単純なものから最も複雑なものへと議論を立ち上げていくこと(292)、より一般化可能な概念によって専門的な議論をおこなうこと(295)といった戦略がみられることを指摘している。

「アンドレ・ルロワ＝グーランと歴史」(Gilles GAUCHER, *André Leroi-Gourhan et l'histoire*)はアナル学派とルロワ＝グーランのかかわりについて述べている。1940年代半ばまでは歴史学とは疎遠であり、自らの研究対象に組み込んでいなかったが(302-303)、1947年以降、アナル学派の第一世代の牽引役であったリュシュアン・フェーブルによって見出され、アナル学派との関係をつよめていったことが詳述されている(303-305)。

「洞窟美術」において、「洞窟美術: 近年の発見との関連でのアンドレ・ルロワ＝グーラン」(Brigitte et Gilles DELLUC, *Art paléolithique: André Leroi-Gourhan à la lumière des découvertes récentes*)と「先史時代の言語、先史学者の言語」(Georges SAUVET, *Langage préhistorique, langages de préhistoriens*)は両者ともにルロワ＝グーラン以後の洞窟美術研究のレビューを全体的な概要は前者、より立ち入った内容については後者が行なっている。ルロワ＝グーランの編年研究を基礎としながらも(250)、洞窟美術のより微細な観察(252)、自然科学による年代測定法の導入(255-256)、マイクロスコープを用いた顔料とその調合の技法の分析・分類(258-259)によって編年の時代区分に若干の変化が加えられ、

単線的な進化の前提が覆されることとなった。このようないわば通時的な編年研究に対して、ルロワ＝グーランの構造主義的な分析手法を共時的な分析としてみなし (261-262)、長期的にみた遺跡ごとの特徴の抽出も一方で試みられている (264)。

「進化」は、霊長類学による「類人猿が分岐するとき：起源から文化進化へ」(Bernard THIERRY, *Quand les primates ont divergé: aux prémices de l'évolution culturelle*)、生物学による「進化への後成的アプローチ」(Peter T. SAUNDERS, *The epigenetic approach to evolution*)、哲学による「喋る骸骨、もしくは人類学によるナルシスティックな夢からの哲学の目覚め」(Franck TINLAND, *Le squelette qui parle ou la philosophie réveillée de son sommeil narcissique par l'anthropologie*) の3論文からなる。霊長類学からは類人猿が安定した社会構造をもつこと (180-181) と高度な認知能力をもつこと (182) を確認し、これらを前提としたうえで、認知科学の成果を援用しつつ、類人猿における社会的学習の存在 (186) と、環境適応では説明できない社会的学習によるある種の伝統の存在が報告されていることを指摘している (190-191)。この論文全体としては、類人猿における社会的学習と伝統の存在をめぐる議論が、動物界における技術の存在を主張したルロワ＝グーランの議論を進めるものとして位置づけなおされている。生物学では、進化心理学の主流の議論において、進化は自然選択の結果であり、自然選択の単位として遺伝子を捉えることが前提となっているとする (197)。つまり、個々の遺伝子の自然選択として進化が把握されている。しかしながら、たとえば言語の出現を、自然選択によってのみ説明するのであれば、言語の複雑性に比して、あまりに単純化したものである (205)。この論文では、ルロワ＝グーランの言語の起源論を進化の後成的アプローチとして捉え、彼の進化論を自然選択の説明に帰してはならないと主張している (212-213)。哲学からは、カント以来の人間学＝人類学において定義された人間とは何かという問題を、ルロワ＝グーランの著作が形質人類学と先史考古学と民族学の成果から応えようとしたものとして把握できることを論じている。

「技術」では、3つの論文が収められている。「「つづく動作、破片から破片」——アンドレ・ルロワ＝グーランの動作連鎖」(Nathan SCHLANGER, «Suivre les gestes, éclat par éclat» – *la chaîne opératoire d'André Leroi-Gourhan*) は、ルロワ＝グーランの著作のなかでの動作連鎖概念の位置づけについて論じている。動作連鎖概念は1950年代まではあらわれておらず、『進化と技術』の初版 (1943, 1954) においても登場してこない (129)。しかし、その概念を発展させる2つの思考法が練成されていた (129)。生物学とベルクソン哲学である。キュヴィエから生命のシステムと同様に技術を捉える手法、リンネから生物分類と同様に論理に基づいて技術を分類するという手法を、生物学の手法を技術研究のモデルとして展開しなおしている (129)。内部環境と外部環境という概念や、生の具体化と成長の潜在性を「傾向」が表現するという着想をベルクソンから導入し、外部環境への内部環境の接合として技術の展開の「傾向」と「持続」が理解されるとルロワ＝グーランは鑄なおしている (130)。また、ホモ・ファールベル (製作する人間) とホモ・サピエンス (知性をもつ人間) という人間の特質を2つの異なる観点から捉えうるという二分法をベルクソンから引継ぎ、初期人類はホモ・ファールベルではあったが、知性による助けがないために十分に技術を洗練化することができないという点で現生人類のホモ・サピエンスには到達していないという議論を展開する (132-133)。しかし、50年代初頭において、ルロワ＝グーランはこの二分

法に懐疑を抱き始めるとともに、この時期にボルドによる石器研究に出逢っている(134)。石器製作技術には動作の連続がみられること、この技術は初期人類にまで遡ること、動作の連続の蓄積が石器製作技術の進化であることから、技術を動作の連鎖のセットとして把握し、動作連鎖概念をつくりあげた(136-138)。ここで、ルロワ＝グーランはファーベルとサピエンスの二元論を技術的知の連続性を示すことによつてのりこえ、その限界を動物世界にまで先伸ばし、人類進化を通してたった一つのリンクとして技術的知を捉え、人類と動物との間にある技術上の連続性を設定したのである(142-143)。したがって、動作連鎖概念は、ルロワ＝グーランの思考のなかで段階的に練成されてきたことが理解されよう。

「アンドレ・ルロワ＝グーランの内部環境と旧石器時代における石割りの分析」(Jacques PELEGRIN, *Le milieu intérieur d'André Leroi-Gourhan et l'analyse de la taille de pierre au Paléolithique*)では、石器製作技術における認知能力について論じている。この論文では、内部環境を人間の認知能力として把握し(152-153)、石器製作技術には、(1)幾何学的な形体についての概念のメンタル・イメージのセット、(2)素材と道具、さらに実際の結果と結びつく基本的な技術的動作である行為の基礎的な手法についての知識のひきだし、(3)行為の結果や製作の現実化の難しさを想像することによつてこれらの基礎的な手法を適用・複合する能力、(4)選択された打撃のプログラム能力と認知の能力、という4点の認知能力が不可欠である(155)。1-2は、型式、対象、基本的動作についての心の表象であり、目に見える知識であり、観察者にも感知することができ、これらは年長者の活動を手伝うことによつて年少時に早くから記憶することができる(155)。これに対し、3-4は、心的な操作に相当し、目に見えず、しばしば観察者には感知できない暗黙知であり、これらは伝承することが難しく、本質的に個人の実践のなかで習得されるものである(155-156)。これまでの先史考古学の成果としては、ルロワ＝グーランによつて古人類と呼ばれた者(ネアンデルタール人など)のなかには現生人類と同等の完璧な石器製作技術を持った者がおり、さきに述べた認知能力を有していると考えられる(158-159)。課題としては、磨製石器・土器・骨角器・ガラス製品の製作技術の研究(159-161)、製作技術にとどまらないスポーツなどにおける暗黙知の研究への研究手法の応用があげられる(161)。

「アンガの悪霊の言葉における動作」(Pierre LEMONNIER, *Les geste en paroles des esprits anga Papouasie Nouvelle-Guinée*)は個別的なフィールドの事例からルロワ＝グーランのいう技術の一般的な「傾向」をみることを困難であることを示している。ここでとりあげるアンガはパプアニューギニアのブタを家畜とする山間農耕民であり、悪霊や病気に悩まされる人間の身体に対する直接的・間接的な諸々の技術をもっている(164-167)。これらの技術は、その処置の細部にまで病気の表象と結びついた細かな規定があるという点において、言葉がなければ存在しえない動作である(167)。こうした技術は近隣の諸集団においてもみいだされるものの、その手法や社会的な位置づけはそれぞれ異なっている(168-170)。これらの技術はこれらの技術に対する表象や社会システムから切り離して理解することはできない(172-173)。その意味では表象の体系や社会システムとしての内部環境と技術との関わりを論じていくことが重要である(174)。

「エピステモロジーと理論」では、以下の5本の論文が収録されている。「『動作と言葉』における社会現象」(Georges GUILLE-ESCURET, *Le phénomène social à travers Le geste et la parole*)によれば、ルロワ＝グーランの著作にはその同時代の理論にほとんど言

及しないという特徴がある (33-34)。ルロワ＝グーランの思考を同時代のエピステモロジーのコンテキスト、具体的には、構造主義と社会生物学と文化生態学のなかに位置づけ (34-36)、これらが自然と文化を対立的に捉え、どちらか一方へと還元してしまうのに対して、ルロワ＝グーランの独自性は自然と文化、技術と言語の対立を補完性と媒介性へと置き換えたところにある (37)。彼は生物学的決定論を拒否することで (39-40)、技術による「自由化」と言語による「自由化」の自律性を方法論的に区別している (41)。その結果として、技術や言語に社会を従属させることを拒否し、動作と言葉という媒介項を挟むことで自然と文化の秩序の間の関係をみようとしている (42)。

「アンドレ・ルロワ＝グーラン、民族、文化と先史学者：失われた出会いの歴史」(Jean-Paul DEMOULE; André Leroi-Gourhan, *l'ethnie, la culture et le préhistorien: histoire d'un rendez-vous manqué*) は、文化概念がフランス考古学において十分に発展してこなかった歴史を辿っている。コッシナ流の伝播説において考古遺物の集合が「民族」と「文化」と同義に語られており (55-57)、フランス考古学においても 60 年代までそのような議論の傾向にあった (58-59)。ルロワ＝グーランによる 1964 年以降のパンスヴァン遺跡の発掘調査は、フランス考古学に決定的な影響を与え、その調査手法や制度、そしてルロワ＝グーランの理論的な著作における「民族集団」についてほとんど検討されることがなかったことから、「民族」や「文化」よりも技術に焦点のあたった研究が進むこととなった (60-61)。80 年代以降、英米圏でのポスト・プロセス考古学における象徴研究や近代における「文化」や「民族」表象における政治性をめぐる議論がフランスでもなされてくるようになった (62-63)。それをふまえ、著者はルロワ＝グーランの著作から民族概念、文化概念についての素描をおこなっている (63-67)。

「アンドレ・ルロワ＝グーランと技術的論理」(Bernard STIEGLER, André Leroi-Gourhan et la raison technologique) は、技術史家のジル (B. Gill) と技術哲学者のシモンドン (G. Simondon) との共通性を示しつつ、「傾向」(tendances)、「事実」(faits)、「外部環境」(milieu extérieur)、「内部環境」(milieu intérieur) といったルロワ＝グーランの中心概念をまとめている。18-19 世紀の生物学における特定の原理にもとづいた分類法を参照しつつ、ルロワ＝グーランは独自の基準で道具の分類をおこなうことによって、道具には生物の進化と類似した進化の「傾向」があることをしめす (71)。ここに、あたかも生物のような進化をみせる技法に、人間とそれを取りまく物質との接合を読みとることができる (73)。このように技術には一般的な「傾向」がみられるものの、個々の技法はそれぞれの環境や伝播や歴史的事象などといった「事実」によって具体化され、個別化される (74-75)。それぞれの地域の生態的条件を「外部環境」と、それぞれの集団に存在する知的な伝統を「内部環境」とが、技術固有の「傾向」と絡みあって、「技術環境」(milieu technique) を構成している (84-87)。

「『動作と言葉』再訪」(Françoise AUDOUZE, *Le geste et la parole revisité*) は、『動作と言葉』を要約しつつ、その内容を振り返っている。ルロワ＝グーランは『環境と技術』においてはベルクソンに、『動作と言葉』においてはテイヤール・ド・シャルダン神父 (Teilhard de Chardin) に強く影響を受けていた (95)。テイヤールのオメガ点についての目的論までは同意することはなかったものの、動物からの人間社会までを包括する進化的決定論のテイヤールへの言及が『動作と言葉』には多くみられる (95)。『動作と言葉』の

前半はルロワ＝グーランの形質人類学での博士論文の成果にあたり、この人骨をめぐる議論のなかから動物から道具を経て機械までを共通の対象とした「外化」(extériorisation)の概念が形成されている(96-97)。こうしたルロワ＝グーランの思考はデリダ(J. Derrida)を介してスティグレールによって「プログラマトロジー」として再編されている(102)。ここでは、特定の動作のセットである動作連鎖が道具にプログラムされることによって、記憶の外化が生じると論じられている(102-104)。記憶の外化としての作業の組織化という動作の連鎖はフォーディズムなどにも明白に読みとれるものであるとルロワ＝グーランは述べているが、現在の産業の組織化においても記憶の外化を読みとることは可能である(107)。19世紀的な人骨の形態論や18世紀的な百科全書的な技術論に読者は困惑されるかもしれないが、そこから練り上げられた諸概念は現代を鋭くうつつだしている(108)。

「アンドレ・ルロワ＝グーランと書くことの進化」(Tim INGOLD, André Leroi-Gourhan and the evolution of writing)は『動作と言葉』から話すことと道具使用の共進化の可能性を概観している。書くことは言語の技術であるとしばしばいわれるものの、話すことと道具使用が共進化の関係にあることはルロワ＝グーランを唯一の例外として論じられてこなかった(109-110)。ルロワ＝グーランによれば、技術的な活動は特定の動作のセットとしての動作連鎖によって成り立っており、活動における身体的・道具的・象徴的な形式はこの動作連鎖によって規定されており、このことは書くことの進化と深く関わっている(110)。直立二足歩行による言語の機能としての顔と道具使用の機能としての手という両極がうまれる(113)。書くという道具を用いた行為の動作連鎖は同じ方向に書き進めるという形式をもつ一方で、図示(graphism)はその図の意味やコンテキストを話すことによって補わなければならない(118)。いずれにしても、両者は話し言葉としての言語のコントロールのもとにある手の動作であった(119)。ところが、印刷物としての書かれたものは書くという行為を失わせるばかりではなく、言語があたかも表象のシステムとしての音声の集合であるかのようなイデオロギーを持つようになってしまった(120-121)。

4

「序論：特異性と多様性」(Françoise AUDOUZE et Nathan SCHLANGER, Introduction: singularité et diversité)では、ルロワ＝グーランが諸分野に与えた影響を論じ、その著作群の全体像を示している。最も読まれた『動作と言葉』(La geste et la parole, ルロワ＝グーラン 2007)では、3つの異なる水準がみいだされるという(18)。進化・技術・言語についての哲学的水準、方法論と技術論における具体的な水準、生物学・形質人類学・民族学・技術論についてのデータと概念を複合した学際的な媒介的水準である(18)。特に、後者の2つに関しては、技術の進化と記憶の外化における身体の重要性を指摘した点、発掘の方法論や考古学の普及の点で重要な役割を果たした(18)。考古学・民族学双方において研究者を育てたが、技術の人類学を引き継いだ弟子の人類学者としてはクレスウェル(R. Cresswell)とバルフェの名前を挙げている(18)。ルロワ＝グーランは『動作と言葉』において、人間性の起源・技術・言語の関連を論じ、最も影響を与えたのはデリダ(1972[1967])の西欧におけるロゴセントリズム批判である。これはスティグレール(2009[1994])に引き継がれている(19)。1955年に提出された形質人類学での学位請求論文である『生ける者の力学』(Mécanique vivante)は1983年になってようやく出版されたが19世紀の形質

人類学の問題設定で書かれた本書はこの分野で影響を与えることはなかった (20)。ルロワ＝グーランによる先史時代の葬送・死後の取扱・墓の空間分析の議論はマッセ (C. Masset)、レクレルク (J. Leclerc)、デュダイ (H. Duday) らによってひきつがれ、過去のイデオロギーの再構成が試みられている (21)。また、先史時代芸術の研究の先駆者としてもルロワ＝グーランは位置づけられ、その後の研究者によって民族事例の広範な比較にもとづく解釈がなされている (22)。英米圏の考古学ではなかなか論じられることがなかったが、過去の人間の認知への関心の高まりや『動作と言葉』の1993年の英訳の出版とともに、徐々に浸透するようになった (22-23)。英米圏では特に「動作連鎖」(chaîne opératoire) 概念が社会的次元と認知的次元の双方において論じられており、フランス語圏でも数多くの解釈が存在している (23)。その意味では、素材が生産物へと変化する過程の諸技術の連鎖における秩序だけでなく、生産における道具使用やその知識や暗黙知、そしてその象徴的・経済的・社会的要素の連鎖における秩序をも分析の射程に入れる概念でもあることを強調しなければならない (23-24)。

5

本書のあまりに多岐にわたる議論の内容はルロワ＝グーランの残した業績の幅広さを反映したものとなっているとあってよいだろう。これまでも一部でルロワ＝グーランは紹介されてきたが、まだまだ不十分な状況にある。特に、ルロワ＝グーランの主著のひとつである『進化と技法』(*Évolution et Techniques*) の二巻本 (Leroi-Gourhan 1971, 1973) が翻訳されていないことによって、彼の技術論への理解が大きく阻まれていることは間違いない。すでに翻訳のある『動作と言葉』とともに同書はフランス語圏でも研究の対象とされており、今後も技術論において、あらたな潜在性を持っているだろう。

ルロワ＝グーランは、形質人類学・言語学・考古学・文化人類学をひとつにまとめた、いわゆる総合人類学を体現したような人物であった。なるほど総合人類学はいまや見る影もなくなつたように思われるかもしれない。しかし、一見すると雑多な本書のなかから、形質人類学に対応するものとして進化心理学や霊長類学が、また言語学からは認知科学が、考古学や文化人類学の主題に重なりつつ、研究を進めていることが読みとれるだろう。本書をはじめとするルロワ＝グーランに関する研究や彼自身の著作には、来たるべき総合人類学が見え隠れしている。

参考文献

スティグレール、ベルナール

2009 『技術と時間 1 エピメテウスの過失』石田英敬監修、西兼志訳、法政大学出版局。

デリダ、ジャック

1972 『根源の彼方に—グラマトロジーについて 上』足立和浩訳、現代思潮社。

古谷 嘉章

2010 「物質性的人类学に向けて」、『社会人類学年報』36: 1-23。

森田 敦郎

2007 「機械と社会集団の相互構成: タイにおける農業機械技術の発展と職業集団の形

- 成]、『文化人類学』71(4):491-517。
- 2011 「モノと潜在性——タルド的視点に基づく機械の民族誌の試み」、『文化人類学』76(1):33-52。
- 山中 一郎
- 2007 「「動作連鎖」の概念で観る考古資料」、『古代文化』58(4):30-36。
- ルロワ=グーラン、アンドレ
- 2007 『動作と言葉』高橋壮訳、あるむ。
- Audouze, F. et N. Schlanger (éds.)
- 2004 *Autour de l'homme: contexte et actualité d'André Leroi-Gourhan*, A.P.D.C.A. : Antibes.
- Balfet, H. (éd)
- 1991 *Observer l'action technique: des chaîne opératoires, por quoi faire?*, Paris: CNRS.
- CNRS (éd)
- 1988 *André Leroi-Gourhan, ou Les voies de l'homme: actes du colloque du CNRS, mars 1987*, Paris: Albin Michel.
- Groenen, M.
- 1996 *Leroi-Gourhan: Essence et contingence dans la destinée humaine*, Paris: De Boeck & Larcier.
- Leroi-Gourhan, A.
- 1971 *L'homme et la matière*, 2éd. Paris: Édition Albin Michel.
- 1973 *Milieu et technique*, 2éd. Paris: Édition Albin Michel.
- 2004 *Pages oubliées sur le Japon*, recueil posthume établi par Jean-François Lesbre, Grenoble: Jérôme Millon.
- Martinlli, B. (éd)
- 1993 *Techniques et culture* 21.
- Villers B.
- 2010 *Husserl, Leroi-Gourhan et la préhistoire*, Paris; Petra Editions.